

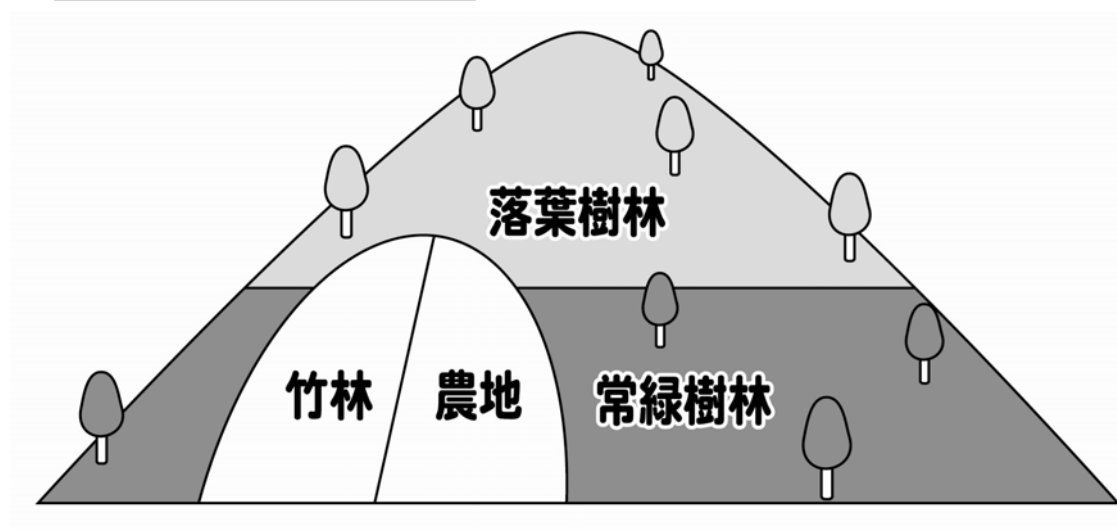
第2節 自然再生目標に向けて

神於山は、植物生態学的にはシイを中心とする暖帯常緑広葉樹林帯に属しているが、伐採・下草刈りなどの人為的な関わりをうけながら、植生が維持されてきた。昭和30年代には、頂上付近や急傾斜地の無立木地であったところもマツ等により植生が回復し、コナラなど二次林が優勢となったが、山麓部は果樹園として開墾され、さらに近年、その果樹園の多くが廃園され、跡地がクズなどに覆われるとともに、マツのほとんどは枯れて消滅する一方、竹林が山麓部はもとより山頂部付近にも拡大している。このように、神於山の植生は時代の変遷とともに大きく変化している。

超長期的には、神於山の植生のイメージとしては、山頂部から中腹部の乾性森林土壌地は、コナラ・クヌギを中心とする落葉樹林帯、中腹部から山麓部にかけての湿性森林土壌地はカシ・シイを中心とする常緑樹林帯を目指すものとする。竹林は、林縁部に常緑の高木性の樹林帯を設ける等を行い、自然の力により拡大を止めていくものとする。なお、果樹園等の営農など農林業の振興を妨げるものではない。

将来に向けた自然再生目標の設定については、里山への再生をスローガンとする「長期的目標」と、竹林対策である「当面の目標」に分別する。

神於山の将来的イメージ
(垂直分布図)



自然再生理念

- 1 森・川・海のつながり
- 2 人と自然・人と人とのつながり
- 3 里山とまちとのつながり

自然再生目標

(1) 長期的目標 (100年後の目標)

「里山の再生」

方向性

- 1 自然植生の保全と回復
- 2 活力ある森の再生
- 3 市民が親しめる自然の再生

(2) 当面の目標

(今後10年で取組むべき目標)

「竹林の適正な整備」

方向性

- 1 竹林の拡大防止
- 2 竹林の適切な管理
- 3 タケの利活用の推進

(1) 長期的目標（100年後の目標）

里 山 の 再 生

神於山の自然、特に植生は、人との関わりを持ちながら、時代とともに変化している。この山に以前から根付いている樹種を保全し、育てることにより、豊かな生物多様性を持つ里山に再生するとともに、併せて市民が親しめる自然としての再生を図る。

方向性1 自然植生の保全と回復

■具体的な目標

○貴重種等の生息環境の保護・保全のほか、多様な植生・生物環境の維持・保全を図る。

□対策

- ・良好な植生の保全を図る。
- ・本数密度の適正な管理（除・間伐）を実施する。
- ・定期的、段階的な伐採、落ち葉かきを実施する。
- ・山地部に隣接する農地、ため池の保全活用を図る。
- ・放置すれば拡大するであろうタケ・クズ・ササの生育を監視する。

○地域本来の自然植生（郷土種（※1））を育てる。

□対策

- ・神於山の麓にある意賀美神社、東葛城神社、神於寺、山直神社の社叢の植生などを調査し、本来の郷土種による落葉樹、常緑樹により、自然林の育成・回復を図る。

※1 郷土種の定義

本構想では、この地域の自然環境によく適応し、自然状態に分布している種とする。

やむを得ず、植物導入をする場合においては、分布域が近畿地方太平洋側に存在する種のものとする。

○人手を加えながら、自然の機能を増進する手法を構築していく。

□対策

・萌芽更新などの樹木更新による森林の活性化を図る。

方向性 2 活力ある森の再生

■具体的な目標

○林相改良等森林整備を行い、土砂の流出及び崩壊を防ぐ。また、土壌の保水力を高め、水資源の涵養を図る。

□対策

・落葉広葉樹林（コナラ、クヌギ等を主体）や常緑広葉樹林（シイ類、カシ類等を主体）の保全・誘導を主体とするが、アカマツ林や植栽されたスギ・ヒノキ林については、適正な管理を基本とする。

○適正な本数密度、針広混交林など、生態的に健全な樹林への誘導を図る。

□対策

・針葉樹林は本数密度管理が重要であり、適正な間伐の実行を図る。

○森林の整備・管理を適正かつ継続的に行うため、効率的な路網の整備を図る。なお、道路等の整備については、自然環境への負荷を可能な限り小さくする工法を検討する。

方向性 3 市民が親しめる自然の再生

■具体的な目標

○点在する歴史・文化資源との調和を図る。

□対策

・神於山には、古くからの歴史があり、数多くの史跡が存在しており、里山の自然と文化は一体となり現在に至っている。それを伝承するために、世代間交流や学習体験ができる場を保全・整備する。

○環境学習、散策など市民の保健休養の場の提供を図る。

□対策

- ・保全活用の計画づくりや維持管理において、積極的な市民参画が得られる活動となるよう自然体験型の行事や環境学習等を行う。
- ・山の資源の活用をしていくことが里山の保全再生には必要であり、炭焼きや散策道整備での利用、イベント時での活用等を図る。

○神於山のランドマークとしての働き、神於山からの眺望の向上を図る。

□対策

- ・クズ等の繁茂地など荒廃地を森林に再生する。
- ・展望地にふさわしい箇所については、施設整備や樹種について検討する。

○自然の回復力をこえる過度な利用（オーバーユース）を制限する。

□対策

- ・適正な利用の仕組みを検討し、計画・実施後には検証を行う。

（２）当面の目標（今後１０年で取組むべき目標（※１））

竹 林 の 適 正 な 整 備

※１ 長期的目標である「里山の再生」の取組みと併せて、特に今後１０年間に重点を置く目標と位置付けをする。

放置竹林の拡大をめぐる課題は、第１章第４節１に記述するとおりである。
このため、当面の目標を定め、竹林の拡大・荒廃を食い止める対策を図っていく。

方向性 1 竹林の拡大防止

■具体的な目標

○現状より、竹林を拡大させない。

□対策

- ・二次林・針葉樹林へのタケの侵入を防止することが、緊急的課題である。
- ・竹林が拡大し林冠を被うと二次林、針葉樹林は衰退していく。このため、タケが侵入あるいは侵入するおそれがあるときは、タケの伐採を行って、二次林等の劣化、消滅を食い止める。健全な樹木は残しつつ、タケを必要期間（3～5年間）伐採し、必要に応じて郷土種の補植をして、植生の早期健全化を図る。

方向性 2 竹林の適切な管理

■具体的な目標

○竹林の密度管理を行う。

□対策

- ・タケは密生しすぎると、周囲に向かって地下茎を伸張する習性がある。このことから、竹林の拡大防止と、健全な林地の保持、景観の保持のため、ha 当たり 6,000 本以下に密度管理を行う。

方向性 3 タケの利活用の推進

■具体的な目標

○タケの利活用を推進し、その継続実施を図る。

□対策

- ・密度管理を行い、優良竹材・タケノコを生産する。
- ・竹材の農業用利用、竹炭や竹チップとしての生産の拡大を図る。
- ・タケの林外利用の促進を図るため、イベントなどでPRを行う。